思い出の人-日本の動物学者

小原秀雄先生との会談

縄文柴犬研究所　五 味 靖 嘉

小原秀雄先生は、2022年4月21日、94歳・老衰にて永眠と娘のU子さん（比較発達学）よりお知らせがありました。

哀心よりお悔やみを申し上げます。

小原秀雄先生の業績の多くは、私ごときが語る資格もありませんが、文末にほんの一部分ですが略歴を掲載したので参考にしていただきたいと思います。

ここでは、私との関りとJSRCに至るまで、小原秀雄先生との文通や電話会談、そして忘れられない沢山のご教授がありました。その中からの断片ですが、30年前の記憶と思い出に触れてみたいと思います。

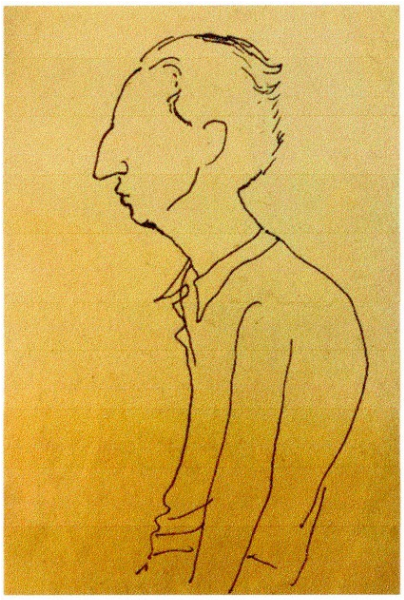
この拙文の趣旨をU子さんにお伝えし、内容のご指導を頂き、画像も含め快く許可を頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

↑写真1　1996年頃に寄稿して頂いた原稿に同封されていた写真です。

我が家でともに過ごしたアフリカの野生動物たち

↑写真2 右：木彫

・アフリカ現地にて先生ご自身で、とても素朴だと仰せになり求めたとのことです。



父が描いた自画像

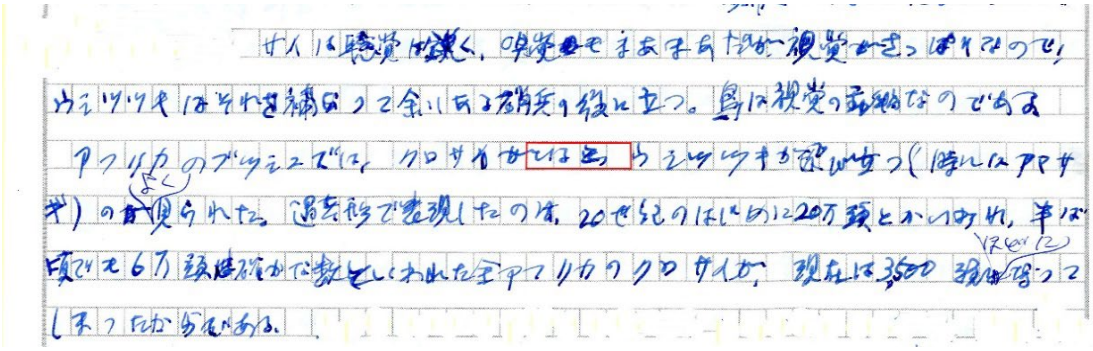
↑写真 3：自画像

空白のあった原稿

小原秀雄先生の執筆原稿を会誌に掲載する際、色々な断片が甦りますが、その中に印象に残ることを紹介させて頂きます。

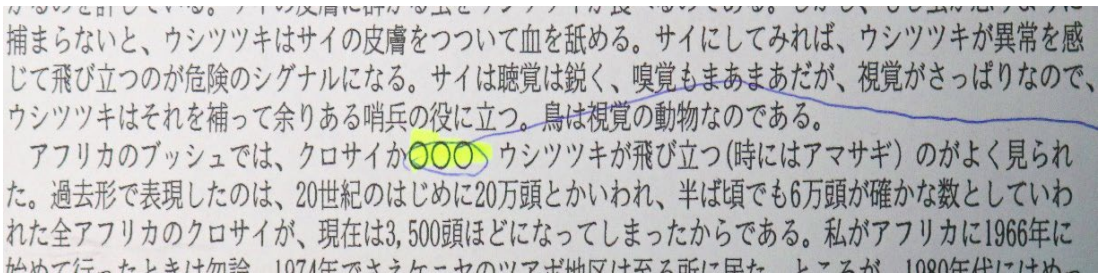
それは、「異なるもの同士の結びつき」（HP掲載）という寄稿文のことです。本文の中ほどに『アフリカのブッシュでは、クロサイか□□□ウシツツキが飛び立つ(時にはアマサギ）のがよく見られた。』（写真4)とあります。赤く囲み□の箇所は、先生の原稿は空白でした。

写真4
→
赤い囲い
部分



原稿は先生の万年筆・インクの色からするとモンブランかも知れない（後日、U子さんより、この判断は正解、色はロイヤルブルーとのことでした）。その手書き文を、私がワープロに打ち直します。そのワープロ文の第一稿を先生に送り、校正して頂くというのが、当時、一般的でした。

写真5
→
丸印箇所



捕まらないと、ウシツツキはサイの皮膚をつついて血を舐める。サイにしてみれば、ウシツツキが異常を感じて飛び立つのが危険のシグナルになる。サイは聴覚は鋭く、嗅覚もまあまあだが、視覚がさっぱりなので、ウシツツキはそれを補って余りある哨兵の役に立つ。鳥は視覚の動物なのである。

アフリカのブッシュでは、クロサイか○○○ウシツツキが飛び立つ(時にはアマサギ）のがよく見られた。過去形で表現したのは、20世紀のはじめに20万頭とかいわれ、半ば頃でも6万頭確かな数としていわれた全アフリカのクロサイが、現在は3,500頭ほどになってしまったからである。私がアフリカに1966年に

その第一稿に、私は空白（写真 5の○○○黄色）を記入して送りました。

先生から電話で「五味くん、君ならここに記入するのは何か？」と聞いて来るではありませんか。これは驚きました。私は、咄嗟に声が出ませんでしたが、原稿を読んだつもりなので「え～ッ・・・シロサイとかキリンでしょうか？」と答えました。すると先生は、「そのどちらでも良い、好きな方を記入して・・・」と言うではありませんか。まだ初心者の私は驚きを隠せなかったが、静かな優しい会話が続いたことが今でも印象に残ります。

凡そ25年前の当時を思い返すと、原稿をよく読んでいるか、内容を理解しているか？と、確認したかったのではないか？そのようにも受け取れるからです。この対談には、先生の優しさが滲み出ており、何故か嬉しい不思議な気分にさせられました。私の未熟な編集者に対する、心遣いが感じられます。今でも、当時のこと・電話の声が耳に残り、何時か先生にお目に掛った時、原稿の空白を残した理由を伺うつもりでしたが、そのままになっております。

寄稿文との出会い

アフリカゾウ国際保護のお知らせは、後日、U子さんのご指摘で1996年頃と判明しました。私の記憶は殆ど消えておりましたが、見つけ出したファイルの中の資料によると、読売か朝日新聞の広告の切り抜きや、入手先不明のチラシが残っており、それを参考に会誌用原稿を作成しています。そんな経緯から、先生にこの内容の確認と、許可を頂く必要があったからです。

《1998.1.22「アフリカゾウ保護のためにご支援のお願い」》この見出しで、1ページの記事にまとめました。こうした経緯により、初めて小原秀雄先生と会誌の関係が生まれました。記録の内容から会誌記事になるまでは、2年近くの時間が経過したようです。こうした交流が、「アフリカゾウ保護」と、小原先生との出会いが深まったように思います。

私の記憶には消えておりましたが、当時の会誌を見ると、有志によるささやかな気持ちの記録も残されておりました。更に面白いのは、その会誌の記事を見た会員が、夏休みを利用しアフリカ旅行されました。その報告に、マサイ族の村にいた犬（日本の犬と似ている）の写真2枚が掲載されておりました。これは国際的な視点で、縄文柴犬との関りや、その比較に目覚めたような出来事でした。こうした経験が、やがてHP掲載の「アジアのイヌシリーズ」写真集へと発展し、30年の歳月により集積され続けております。

同じ1998年には、先生が日本女子栄養大の引退記念講演がありました。そのご招待を戴きましたが、生憎の不都合により出席できない趣旨の、メモが残されておりました。当時私は、30頭余の縄文柴犬を5つの集団に任意分類し、様々な課題を設けた研究に着手しておりました。例えば、縄文柴犬の「遠吠

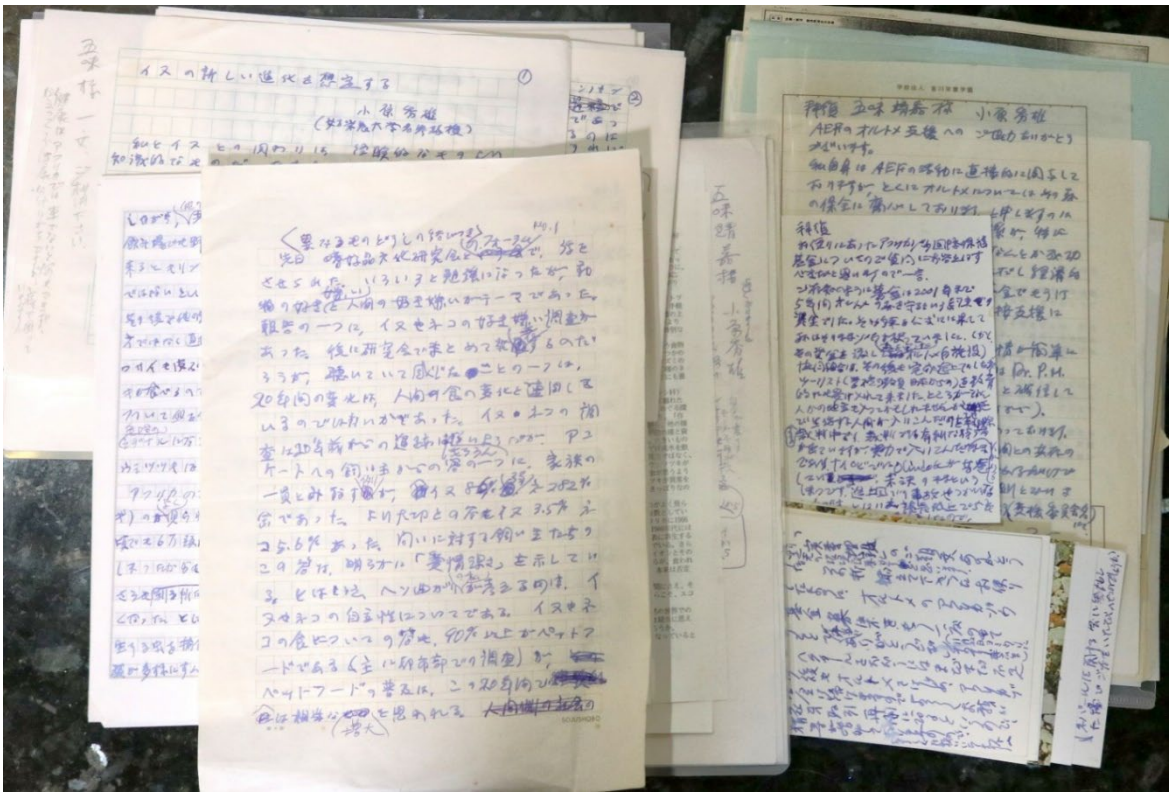


写真6　小原秀雄先生の原稿・左上：イヌの新しい進化を想定する。左下：異なるものどうしの結びつき。
右：アフリカゾウの関りなど、編集に係る文通資料。

え」の「質」の違いやその意味、仲間同士が移動したときの状態など、面白いことがありましたが、結局未完成のままです。その記録の一部分は、当時の会誌にも連載しました。

小原秀雄先生とのお手紙や電話などの交流は、手元の資料からすると、1994年ころの断片が保存されておりますが、ある筈の資料も行方不明、私の記憶もそれなりに曖昧です。しかし私は、先生の翻訳1966「人イヌにあう」や、著書1972「日本野生動物記」「続日本野生動物記」（中央公論社）を読んで（他にもたくさんあるが）、イヌのことや自然環境と野生動物の関わりに触れ、胸の震えを覚えておりますが、それは多くの方々も同じではないでしょうか。

以下は、先生の寄稿文からの懐かしい思い出に触れます。

2001.5.25「イヌの新しい進化を想定する」（JSRCのHP掲載）

ここでの最大の特徴は、進化というテーマで寄稿して頂きました。この中で、イヌは人と10000年以上特殊な共生関係にあり、相互進化とよばれる法則性に基づいた歴史的変化が起こっている筈である、と述べています。

『ところでイヌはまたゾウとはちがって人間と一体化した特殊な家畜であり、その歴史が最も長い種である。イヌが人間の用途や愛玩のために、様々な品種を人為的に分化して作られたことは言うまでもないが、それとは別に人間との間に「愛」に基づくといわれるような、特殊な相互関係を成している。それをどのようにみなすかから、私の想定が根拠づけられる。』

先生が述べたこの問題は、所謂、愛情物質のオキシトシンとして近年、科学的に論じられ、そして、動物行動学に於いても目を見張る多様な進展がありました。

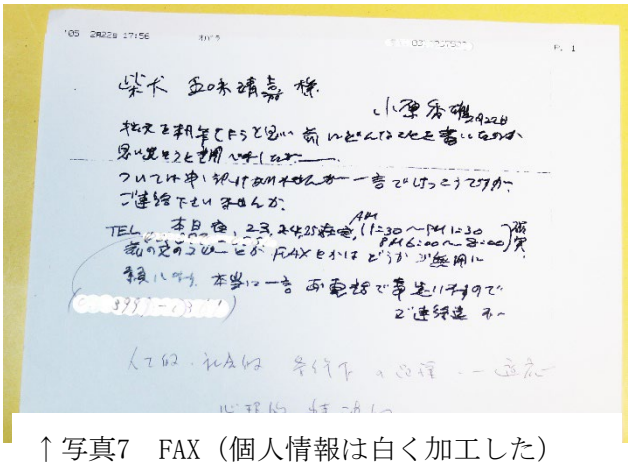
『人間が作り出す環境の中で生活するという点から、人間の気持ちを読みとるとか、人間の行動に適応した行動をするといった行動では、これほど優れた動物はいないといいたいのである。』（以上『』内原文のまま）

先生は「総合進化」という広義の分野について触れています。これを教えて頂いた私は、それなりに視野が広がり、地域環境・条件に適応する、縄文柴犬の「予知能力」に確信を得ました。そして、このころから獣害対策での新たな実験に向けた様々な応用が始まったのです。

2005.4.25「異なるもの同士の結びつき」（JSRCのHP掲載）

「はじめに」の内容で述べましたが、この時期の電話会談は何度かあります。とても優しい口調ですが、鋭い内容を感じており、その記憶は、今でも楽しく余韻が残ります。

私が先生に執筆をお願いした「FAX原稿メモ」がファイルの中に残されておりました。そして、先生よりの「FAX返信、2/22.17：56」（写真7）があります。その内容に『拙文を執筆しようと思い、前にどんなことを書いたのか思い出そうと調べましたが・・・ついては申し訳ありませんが、一言で結構ですからご連絡下さい。』とあり、都合の時間帯と



↑写真7　FAX（個人情報は白く加工した）

電話番号が書いてありました。

つまり、前の執筆内容は「何か」、「今度はどんなテーマが良いか」電話で打ち合わせしたい、という意味に受け取りました。ここにも先生のお気持ちがよく出ております。早い話が、今度の執筆内容を決めかねているので、何かヒントになることを会談しよう、と理解できます。その受信したFAXの余白には、私の鉛筆書きで「人工的・社会的条件下の品種・・・適応、心理的・精神的」と、何とか判読可能なメモがありました。この鉛筆書きのメモは、先生から電話で聞いたものか？それは判りません。しかし、これが表記の「異なるもの同士の結びつき」の歴史的な執筆に繋がったのだろう、と勝手に想像することにしました。

この論文の中ほどに、以下のような記述があります。

『思い出すのは旧ソ連で、森林と草原の接点にある生態圏保護区へ親友の科学アカデミー幹部会員だった故ソコロフ博士の配慮で訪れたとき、森番が飼っていた雌オオカミである。別に特別な亜種でも個体でもないのだが、実によく馴れていた。子どもの頃から飼われていたというだけあって、私の娘と喜んで遊ぼうとして、舐めまわして、全身でイヌ化を示していた。日本では野生的な原型をどのように比較生態の対象とするかといえば、野生のイヌ科動物か、二次野生化したイヌを考察の対象にするのが順当であろう。』

文中にある「娘」というのは、「U子」さんです。その時の思い出の印象を、今回のこの拙文に補足として、次のように話しくださいました。

“1986年9月2日羽田発、2週間の計画で、ヘラジカを見に行くのが目的でした。かれこれ30年前の記憶では、モスクワから随分車で走り、森林の中にある研究者宅を訪問しました。そこにはオオカミがいて「ジーナ」と呼んでいました。森番の話では、まだ小さかったオオカミを山の中で拾って、大切に育てたのだそうです。このオオカミは、良く人馴れしてU子さんの肩に前肢を伸ばし、顔を舐めまわして離れないので、困ってしまい、その場所を少し離れました。それでも前肢を低く「遊びを誘う仕草」など、大きな体躯でもあり少し怖い印象が残っています。”と、当時を回想くださいました。

小原先生の本文では、『全身でイヌ化を示していた』と表現しております。

この「異なるもの同士の結びつき」の内容、先駆的に意味するところは、20年前に「共生関係」という分野を会誌で扱っていただけたという事になるでしょうか。2022年現在、自然環境との共生関係（人・動物・植物）は、多様性を論ずることが避けて通れない、今日の大きなテーマです。

小原秀雄先生、感謝で一杯です、ありがとうございました。安らかにお休みください。

（2022.10.25記）

主な略歴

小原 秀雄（おばら ひでお、1927年7月2日 -2022年4月21日 ）東京都生まれ。法政大学中退。国立科学博物館助手、女子栄養大学助教授、1969年教授。1998年定年退任、名誉教授。日本の動物学者、女子栄養大学名誉教授。哺乳綱の研究で知られる。（生態学・動物学）1973年～1993年、世界自然保護基金日本委員会理事[1]。1982年～1990年、総理府動物保護審議会委員[1]。1982年～1993年、トラフィック・ジャパン（野生動植物国際取引調査記録特別委員会）委員長[1]。1988年～1994年、日本自然保護協会理事長[1]。1988年～2000年、国際自然保護連合（ＩＵＣＮ）役員[1]。1988年～2000年、国際哺乳類学会北東アジア代表委員[1]。 その他、総合人間学会名誉会長、日本環境会議代表理事、自然の権利基金代表理事、ヒトと動物の関係学会顧問、NPO野生動物保全論研究会会員[1]。共生社会システム学会会長・元会長[1]。

以下、著書・共著・訳書・監修は多数、以下は省略させて頂きます。